

パスパ文字の字母表について

中村雅之

1. 二つの字母表

1269年に公布されたパスパ文字は、モンゴル語と漢語をはじめとしていくつかの言語の表記に用いられたが、それぞれの言語に実際に使用された字母の総数や正確な字形などについてはまだ不明の点も多い。パスパ文字の字母表としては、現在二種が知られている。第一は、盛熙明『法書考』や陶宗儀『書史会要』に収録されたもので、おそらくは元代に最も通用した字母表を基礎として作られたと想像されるもの。第二は『蒙古字韻』に収められた、漢語を記すための字母表である。

2. 第一種字母表について

次に掲げるのは上海書店1984年版『書史会要』巻7所収のパスパ文字字母表である。この第一種字母表はいずれのテキストにおいても字形の崩れが激しいが、中でも上海書店版は比較的字形が整っている。⁽¹⁾



(1)上海書店版は洪武刊本に基づく再影印である。第一種字母表の伝本については、吉池孝一(2006)『書史会要のパスパ文字字母表のeなどについて』『KOTONOHA』42号を参照。

各字母の下に音訳漢字が付され、最初の三行の最下段の音訳漢字が欠落しているが、『法書考』巻2によって(それぞれ右から)「車」「那」「擦」を補うことができる。これらの音訳漢字にはいろいろと検討すべき問題があるが、別の機会に譲ることとし、今回は触れない。

第6行の第5字と第6字の字形は標準的ではないが、記された位置や音訳漢字によって「𐰣(q)」および「𐰤()」と推測されている。また第7行第2字「𐰣」の字母はモンゴル語と漢語には用いられず、それ以外の言語のための字母と思われるが、使用例を知らない。しかし、これらの字形については、近年公開されたハラホト文書を参照することによって確認が可能である。吉田順一 & チメドルジ(2008)⁽²⁾に示されたパスパ文字文書(No.086)がそれである。



この文書はパスパ文字に慣れるための習字の一部と思われるが、残存部分は全て基本字母に母音「i」を付して綴られている。第一種字母表とほぼ同じ字母順で綴られたこの文書によって、第一種字母表の「q」「𐰤」と推測される部分が間違いなく「q」「𐰤」(第3行第5字、第6字)であることが確認され、また、使用例の確認されていない「𐰣」(第3行第8字)がもとの字母表にも確かに存在したことが確認できるのである。

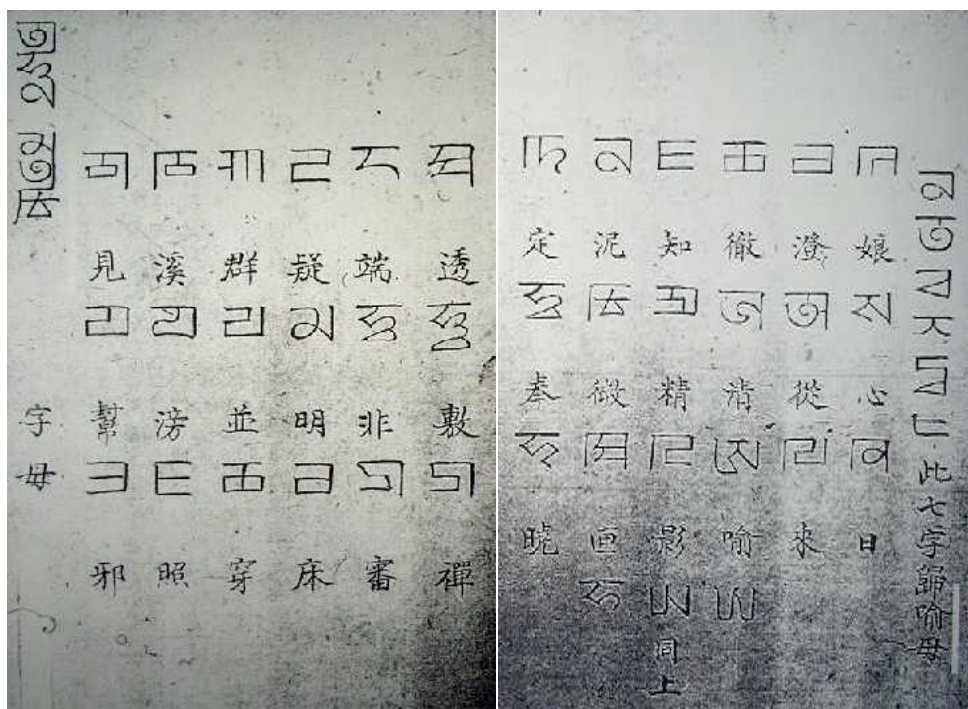
3. 第二種字母表について

『蒙古字韻』に収められている第二種字母表は漢語音を表記するための字母表であるため、漢語の伝統的な三十六字母の順序に従っている。

この字母表の最大の特徴は左から右への横書きの配列になっていることである。前掲の第一種字母表は『法書考』や『書史会要』という漢語の書物に収録されていたために漢文と同様の配列(右から左への縦書き)になっているが、一方、第二種字母表の方は、『蒙古字韻』が全体としてパスパ文字の一般的な配列(左から右への縦書き)に従っているにもかかわらず、字母表の部分のみが異なる配列である。これについても、ハラホト文書が重要な示唆を

(2) 吉田順一 & チメドルジ編(2008)『ハラホト出土モンゴル文書の研究』、東京：雄山閣。

与えてくれる。すなわち、上で見たハラホト文書は、第二種字母表と同様に、左から右への横書きである。これを単なる偶然と見ることはできない。



(『蒙古字韻』所載の字母表)

13～14世紀の中国文化圏において一定の影響力を有した文字群を見ると、左から右への横書きの配列を持った文字はチベット文字のみと言ってよい。そして周知のごとく、パスパ文字の字形はほとんどがチベット文字に由来する。これらの事実から可能となる推測は、パスパ文字の字母表が本来、チベット文字式の配列すなわち左から右への横書きであったということである。おそらくは、チベット文字の字母表を土台にしてパスパ文字の基本字母表を作ったために、チベット文字式の配列になったものであろう。ハラホト文書はその配列に従って習字練習をしたものであり、第二種字母表は三十六字母の字母順を取り入れつつも、全体的な配列は変更しなかったと考えられる。

字母順も配列も全く異なる第一種と第二種の字母表であるが、ハラホト文書の存在によって、この二種が同一の基本字母表から別個の変形を受けて伝えられたものであることが推測できる。すなわち、第一種字母表は漢文式の配列ではあるが、もとの字母表の字母順を受け継いでおり、第二種字母表は三十六字母の字母順に従っているものの、もとの字母表の配列(左から右への横書き)を保持しているのである。